

『獄中での賛美』

'22/01/16

聖書箇所:使徒の働き 16章 16-34節(新約 p.261-)

昔、私はこんな風な質問をされたことがあります、「クリスチャンになったら、何がどう変わるんですか？クリスチャンって、様々な教えやルールで窮屈じゃないですか？クリスチャンって、何が楽しいんですか？」って…。もしも皆さんが、このような質問をされたら、どのようにお答えになります？また皆さんは、クリスチャンになったことによって、具体的に何がどう変わりました？間違いなく、この聖書のみことばは、私たちが信仰をもって救われたら、神様によって変えられる！ということをお教えてくれています。しかし、具体的には一体何がどう変わっていくのでしょうか？…恐らく、そういったことは、人それぞれに違っていて…、なかなか一概には言い表わせないかも知れません…。

命題: 神がクリスチャンたちに対して与えてくださるものとは？

しかし、私たちが今日学ぼうとしている聖書のみことばには、ある1つのエピソードを通して…、いつの時代であろうと、また、性別や年代、職業なども関係なく…、真の神様が、すべてのクリスチャンたちに対して与えてくださるものについて、一緒に学んでいきたいと思えます。そうすることによって、今回のメッセージを聴いてくださった皆さんが、ますます、神様に対して忠実な者となっていただくだけでなく…、このような世の中にあっても、希望と感謝をもって歩んでいただきますことを願います。今回の聖書箇所は、使徒 16 章になります。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、使徒 16:16 以降をお開きくださいますようお願いいたします。

I・信仰ゆえの、様々な「**苦しみ**」！(16-24節)

今日のみことばが、まず、1番に教えてくれている事柄は、「**苦しみ**」であります。「**信仰ゆえの試練**」**と言った方が良いかも知れません**。…私たちクリスチャンは、真の神様であるイエス・キリストを信じて救われたがゆえ、様々な「**苦しみ**」を経験することがあるのです。まずは、そういったことを確認していきたいと思えますので、どうぞ、今日のみことばの内、16-24 節までをご覧ください。

- 16 私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをし、主人たちに多くの利益を得させている者であった。
- 17 彼女はパウロと私たちのあとについて来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と叫び続けた。
- 18 幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と言った。すると即座に、霊は出て行った。
- 19 彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。
- 20 そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、
- 21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」
- 22 群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、
- 23 何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。
- 24 この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。

●第2次伝道旅行中、パウロたちに起こったトラブル

今読んだ、みことばを見てみますと、16 節に、『**私たちが…**』という言葉が出てきます。この『**私たちが…**』というメンバーには、当然、このみことばを書き記した「ルカ」が含まれます。ルカを始め、パウロとシラスは、この時、第2次伝道旅行の途中で、ピリピという(現在のギリシャ領にある)町に立ち寄りしました。今日のみことばは、そのピリピの町で起こった出来事について記されてあります。

さて、このピリピの町で、パウロとシラス、そしてルカは、『**占いの霊につかれた若い女奴隷…**』に出会います。この女は占いをすることによって、自分の主人たちに多くの利益を得させていたようですが…、その女は、どういうわけか、パウロたちの後について回っては、17 節にあるように、『**この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです！**』というようなことを叫び続けたわけです。確かに、この女が言うように、パウロたちは、『**神のしもべたち**』であって…、『**救いの道**』を宣べ伝えておりました。しかし、だからと言って、そんなことを叫びながら、後について回られたのでは、まともに伝道することができません。

実際、今日のみことばの 18 節にも、『**幾日もこんなことをするので、“困り果てたパウロ”は…**』と書かれていますように、とうとう、パウロは振り返って、その女奴隷に憑りついていた霊に対して、『**イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け！**』と言うと…、即座に、その霊が女奴隷から出て行ったとあります。しかし、そのことによって困ったのは、その女奴隷の占いによって儲けていた主人たちです。恐らく、この女奴隷は霊が出ていってしまったことによって、その主人たちは、もう占いをし稼ぐことができなくなってしまったのでしょう。

そのため、女奴隷の主人たちは、その仕返しに、パウロとシラスとを捕えて、長官たちに訴えるわけです。その訴えの内容が、20-21 節に記されてあります、『**20 …この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。**』って…。この時、彼らは、あることないこと、適当なことを言って、パウロとシラスのことを訴えます。

実は、この時以降、どういうわけか、ルカだけが別行動を取っています。その詳しい理由は分かりませんが…、ひょっとしたら、ルカだけが買物か何かの遣いに出ている時に、パウロたちが捕えられたのかも知れませんし…、あるいは、ルカだけがギリシャ人だったから助かったのかも知れません…。しかし、いずれにしても間違いの無いことは、この時、パウロもシラスも、何ら法律に触れるような犯罪は犯していなかった！ということです。…にも関わらず、彼らは、実に不当な扱いを受けてしまうわけです。

●みことばが教える、クリスチャンたちを襲うであろう苦しみ

今日のみことばの 22 節以降を見てみますと、この時、パウロとシラスとが受けた仕打ちについて、簡単に記されてあります。彼らは、①まず、着物をはがれ…、②何度も、むちで打たれ(=つまり、裸の状態)…、③その後、牢へと入れられ…、④厳重に番をされ…、⑤足には足かせを掛けられました。でも一体、パウロとシラスが何をしたのでしょうか？彼らは、ただ…、女奴隷から悪霊を追い出したのと、イエス・キリストによる救いの道とを宣べ伝えていただけなのです！そうですよね？

しかし、このような不当な扱いを受けたのは、何もパウロやシラスだけではありませんでした…。聖書の至る所には、この聖書のみことばを重んじ…、イエス様を信じた者たちに対する迫害で満ちております。例えば、使徒 7 章では、聖霊に満たされていたステパノという人物が、宣教の一環で、ユダヤ人たちの罪や間違いについて指摘したがために、石打ちの刑にあって、無残にも殺されてしまいました…。また、さらに、その少し前には、使徒ペテロとヨハネとが、イエス・キリストのことを宣べ伝えていたために、議会へと呼び出されて、厳しい脅しを受けたことが記されてあります。いえ、実際、12 使徒たちの多くは、その信仰のゆえに、そのほとんどが殉教していったじゃないですか！

クリスチャンの皆さん…、神様によって真理を知らされた私たちクリスチャンには迫害や問題…、あるいは、苦しみといったものがつきものです。…その理由は、「真理というものが、間違いを排除しようとするから」です。だって、そうでしょ？…もしも、誰かが「1+1=2」以外の答えを書いていたら、「それ違います」と言うでしょ？…それがもし、真の神様に関することや救いに関するのなら、なおさらありません？

だから、例えば、**Ⅱテモテ3:12**には、**こう記されてあります、『確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。』**って…。また、**ピリピ 1:29**には、**『あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。』**とも…。このように、聖書のみことばは、間違いなく、私たちクリスチャンが本物の信仰をもって救われた時…、神の前に正しく生きようとしていった時に、迫害や信仰ゆえの苦しみがある！ということを教えてくれています。

ですから、クリスチャンの皆さん！…もしも、今後、皆さんが信仰ゆえの苦しみや試練を経験するようなことがあったら、ぜひ、思い出してください！…そのような苦しみは、あなたが救われて…、神があなたを用いようとしていた結果なのです！…そのような苦しみや試練の後には、必ず、神様の祝福や慰めがあるはずです。…どうか、真の神様を信じ続けて、神様の御業に期待する者となっていきましょう！

Ⅱ・いかなる状況でも失うことがない **希望** ! (25 節)

さて、どうぞ、もう一度、今日のみことばに戻ってみてください。神様が私たちクリスチャンに与えてくださったものは、苦しみや困難といったような…、一見するとネガティブなものだけでは決してありません。天の神様は、私たちが信仰を持つと同時に、**いかなる状況であったとしても、決して失うことが無いような“希望”をも与えてくださったのです！**…今日のみことばの 25 節には、こんなことが記されてあります。

25 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。

●投獄中の真夜中に、パウロとシラスが実践したこと

今読んだのは、たった 1 節ですが、でも、この 1 節だけでも、パウロとシラスが、自分たちを襲ってきた困難をどのように受け止めていたかが、十分分かります。皆さん、覚えてくださっています？この時、パウロとシラスとは、どういった状況の中におりました？

この時、パウロとシラスはむち打ちのため、間違いなく、背中に激しい痛みが走っていたはずですが、このことは、今日のみことばのすぐ後を見ると分かるのですが、時の長官たちは、パウロたちがローマの市民権を持っていることを知らずに、早合点をしたことが分かります。そして、そのことを後で知った長官たちは、パウロたちに、お詫びをして、パウロたちを釈放したわけで…、つまり、長官たちの判断は間違っていたのです。…と言うことは、先程から言ってる通り、パウロたちは正当な理由もなく、不当な判断でもって、むち打たれ…、牢屋に入れられたわけなのです。

もしも皆さんが、パウロたちのような状況で…、正当な理由もなく、むち打たれ、投獄されたとしたら、どうされるでしょうか？果たして、皆さんは、**I テサロニケ 5 章のみことばが**教えてくれているように、投獄さえも感謝できるでしょうか？…パウロやシラスがしたように、投獄されたその日の夜に、神様に祈りつつ…、賛美を捧げることができるでしょうか？

パウロたちの賛美は、心からの賛美であり、神様に対する感謝で満ち溢れたものであったはずですが、だから、先程読んだみことばが教えてくれているように、**彼らの賛美を聞いて、『ほかの囚人たちも聞き入っていた…』**のです。…でも、一体どうして、パウロとシラスは、普通なら、悲観して、多くの人たちが落ち込んでしまう状況の中で、神様に賛美を捧げることができたのでしょうか？

●パウロたちが絶望しないで、希望を持ち続けることができた理由

それは、パウロたちが、「希望」を持っていたからではないでしょうか？彼らは投獄されたからといって、決して絶望しませんでした…。それは、自分たちが信じ仕えている、真の神様が全知全能であられる！どんなことでも御出来になる！神様は、この状況をも、最善なるみこころの内にコントロールしておられる！ということに堅く信じていたからです。どうぞ、皆さん、もしできましたら、使徒 26 章に記されてあります、パウロのメッセージと言うか、彼の証しに注目していただけます？**使徒 26:6-8、『6 そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。8 神が死者をよみがえらせるということ、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。』**

⇒この時、パウロは裁判にかけられて…、時の王であったヘロデ・アグリッパ王に対して弁明をしています。その弁明の中で明らかになっているのは、パウロの、真の神様に対する理解と言うか、彼の信仰です。ここ 7 節で、パウロがはっきりと主張しているように、パウロは、「真の神様になら、例え、死者であってもよみがえらせることができる！」ということに堅く信じていたということが分かります。

また、それだけではありません。このパウロは、**Ⅱコリント 1:10**でも、**こう証してくれています。『ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。』**って…。⇒まさしく、パウロが信じて理解していた神様は、全知全能であり、どんなことでもできる主権者でもありました。だから、パウロたちは、牢獄の中にあっても、決して絶望することが無かったのです。

Ⅲ・私たちが生きる目的へと導いてくれる、**信仰** ! (26-32 節)

さあ、それでは、次に3つ目のポイントを見ていきたいと思います。神様がすべてのクリスチャンたちに与えてくれるもの、**それは、私たちのことを生きる目的へと導いてくれる、“信仰”であります。**ひょっとしたら、生きる目的とか、すべての問題に対する解決と言った方が良いのかも知れません。どうぞ、もう一度、今回のみことばに戻っていただきまして、その 26-32 節をご覧ください。

26 ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。

27 目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げたものと思ひ、剣を抜いて自殺しようとした。

28 そこでパウロは大声で、「自害してはいけません。私たちはみなここにいる」と叫んだ。

29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏した。

30 そして、ふたりに外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。

31 ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。

32 そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。

●この時、看守が驚いた理由

さて、パウロたちが捕えられた、まさに、その日の夜、大地震が起こりました。もちろん、これは、単なる偶然ではなく…、神様の御業であることは間違いありません。その地震によって、パウロを含む囚人たちを拘束していた鎖が解けてしまいました。その時、目を覚ました看守は、囚人たちが皆、もう逃げたかと思ひ込んで、自殺しようとした。でも一体、何故、この看守は自殺しようとしたのでしょうか？

どうぞ、皆さん、もしできましたら、使徒 12:18-19 をお聞きくださいます？そこには、こんなことが記されています。『18 さて、朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こった。19 ヘロデは彼を捜したが見つけることができないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤに下って行って、そこに滞在した。』⇒ここで言われているのは、使徒ペテロを逃がしてしまった番兵たちが、ペテロの代わりに処刑されてしまった、ということです。実は、この時代のローマにおいて、囚人を逃してしまうと、その番兵たちが、その責任を取って、本来ならば、その囚人が負うべき罰を身代わりに負わなければならない、というようなこともあったようです。

今から 2000 年前の、この時代は、そういったような時代でした…。だから、今回のみことばで、看守が、自分の番をしていた時に、囚人たちが皆、逃げてしまったものと思い込んで、自殺しようとしたのも、その責任感から…という気持ちもあったかも知れませんが…、それと同時に、「どっちみち、自分は死ななければならない運命にある…」と思い込んだから、ではないでしょうか？

しかし、その時、看守は信じられないものを目にします。…と言いますのも、その時、そこに居た囚人たちは、牢獄の扉が開いて、逃げられたにも関わらず…、誰一人、逃走してはいなかったのです！一体、どうしてでしょう？⇒恐らく、そこにいた囚人たちは皆、真の神様と言うか…、何らかの介入がそこにあったことを感じていたから、ではないでしょうか？もしかすると、他の囚人たちは、この時に、どうして、パウロやシラスが投獄されたのかを知っていたのかも知れません。少なくとも、そこに居合わせた囚人たちは皆、パウロたちの持っていた信仰の片鱗を見ていたことには間違いありませんよね？

例えば、真夜中の賛美がそれです。そして、まさにそんな時…、その日の内に、大地震が起こって、すべての牢が開き、皆の鎖が解けてしまったのです。「偶然に、これらのことが起こった…」恐らく、囚人たちも、そうは思えなかったでしょう。それが、囚人たちを脱獄という行為から守り…、大きな証しの機会(=福音を語るチャンス)となったのです。

この時、看守は、自分の自殺を食い止めようとしたパウロとシラスを見て、『震えながらひれ伏した…』(29 節)とあります。そして、驚くべきことに、パウロとシラスとを指して、『先生がた！』という風に呼び掛けます。実は、ここで看守が呼びかけた言葉である、『先生がた！』という言葉(κύριος)は、ギリシア語の「キュリオス」という言葉で、もちろん、先生でも良いのですが、場合によっては、ご主人様とか、あるいは、神様のことを指す場合が多い言葉なのです。つまり、この時の看守は、それほどまでに、パウロとシラスとのことに深い尊敬を抱いていた、ということが分かります。

そうして、その次に、看守が発した言葉が、こうでした、『救われるためには、何をしなければなりませんか？』って…。何と感謝なことに、この時、看守の方から、「救いの方法(=真の神様)」について聞いてくる、ということが起こったのです。私たちがすると、願ってもないような…、最高に嬉しいことが起こったわけです。このことから学ぶべきことは、私たちも、まず希望をもって…、正しく生きていくことです！…と言いますのは、私たちの希望や感謝に溢れた生き方が、私たちの持っている信仰や神様のことを証しするからです！…実に、そういったことのためにも、試練や困難というものは必要なのです。だって、試練や困難の時にこそ…、私たちの持っている信仰が明らかにされるからです。そうじゃありません？

実際、パウロとシラスにしても、こういった投獄といったような困難が襲ってこなければ、彼らの言葉や証しがどれほど素晴らしいものであったとしても、このような形で看守の方から、福音に関して、耳を傾けるようなことは無かったわけですよ。

●パウロたちが語った福音のメッセージ

さて、その看守の質問に対して、パウロとシラスが語った言葉が、有名な 31 節の言葉です、『ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。』この言葉通り、看守とその家族とは、この後すぐに信仰を持ったことが、33-34 節から分かります。

『主イエスを信じなさい…』という言葉以外、彼らが、救いに関して、どのような内容を語ったのか、詳しくは記されていません。しかし、まず分かりますことは、彼らは、イエス様のことをただの人間として語ったのではなく…、「主イエス様」として語った、ということです。つまり、「イエス様こそは、私の…、あなたの主人である！」ということです。果たして、皆さんは、このイエス様のことを、自分のご主人として、信じ受け入れていらっしゃるでしょうか？

ここで、パウロが信仰を持った時、あのイエス様から、直接かけられたお言葉について見ていきましょう。パウロが回心した時のことは、使徒 26 章に記されています。この時、パウロは、クリスチャンたちを迫害すべく、ダマスコと言う町へ向かっておりました。…しかし、その途中で、復活後のイエス様が天から、パウロにこんな言葉をかけられたのです。

使徒 26:15-20、『15 私が『主よ。あなたはどなたですか』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。16 起き上がり、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンへの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中において御国を受け継がせるためである。』19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。』

⇒ここで、パウロ自身が証ししてくれているように、パウロがイエス様から示されて、伝えてきた福音のメッセージは、2つのポイントで説明できます。それは、①まず、悔い改めて、神に立ち返れ！ということと、②もう1つは、その悔い改めにふさわしい行ないをしなさい！ということだったのです。

しかし、近年、多くのキリスト教会が語っているメッセージは、「あなたは愛されている！価値があるんですよ！あなたは、そのまま良いですよ！」というような生ぬるいメッセージばかりで、イエス様やパウロたちが教えてくれたような…、私たちの罪と、その罪からの悔い改めを熱心に説くようなものでないように思っているのは、私だけでしょうか？…どうか、今日このメッセージを聞いてくださった皆さんには、イエス様のことを私たちが信じ従うべき「主人として…、あるじとして…」伝えていっていただきたいと思います。

IV・特に救われた者同士に見られる、「愛」！(33-34 節)

最後、4つ目は、特に、救われた者同士に見ることのできる、「愛」です。神様は、イエス様を信じて救われた者たちに、信仰ゆえの、愛を与えてくださいます。最後に、そういったことを確認していきたく思いますので、どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻っていただきまして、その、33-34 節をご覧ください。33 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとで、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。34 それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

● 信仰を持った看守が起こした行動

この看守とその家族とは、真剣にみことばを聞き…、信仰を持って、救われたようです。どうして、そう言い得るかと言いますと…、どうぞ、33 節をご覧ください。…何だと思われます？『バプテスマを受けた…』ということも、ある意味、そうかも知れませんが、私は、むしろ、その前の方に注目を置くべきだと思います。33 節の初めに、『看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。…』とありますでしょ？その少し前の 23 節を見てみますと、看守は長官たちから、『看守には厳重に番をするように命じた…』とあります。だから、この看守は、パウロとシラスをわざわざ、『奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた…』わけです。恐らく、この看守は、比較的、真面目で責任感の強い人物だったと思われる。…と言うのは、先程見たように、この看守は、囚人たちが脱獄したと勘違いして、自殺しようとしたくらいですから…。

…にも関わらず、この看守は、信仰をもった後、どんなことをしました？⇒この時、看守は、まだ囚人であったはずのパウロとシラスとを勝手に引き取って、自宅に連れ帰って、介抱したのです。35 節以降を見れば分かりますが…、パウロたちが、正式に釈放されるのは、この翌朝になってからです。もしも、そんな状況下で、例え、看守とはいえ、「勝手に囚人を家に連れて帰って介抱した！」、なんていうことが明らかになったら、まず間違いなく、何らかの処罰が下されたはず。それでも、看守はそれをしたのです！明らかに、ここに、彼の信仰の証しがあるのではないのでしょうか？⇒それは、目に見える権威(＝長官たち)に従うよりも、神様という本当の主人に従う！という態度であります。

今日のみことばの最後、34 節には、『心から喜んだ…』と記されてありますが、実は、ギリシア語の原語には、この『心から…』という言葉は有りません。しかし、この翻訳は間違っではありません。それは、この『喜んだ…』という言葉が、非常に大喜びを指す言葉(例マタイ 5:12; ルカ 10:21; ヨハネ 8:56; I ペテロ 1:6,8; 4:13)だからです。この言葉には、「大喜びする、踊りあがって喜ぶ」、そんな意味があるのです。

彼らは、ほんの少し前まで、看守と囚人という関係でありました…。そして、この時のパウロとシラスとの背中には、まだ間違いなく、耐え難い程のむちの傷と痛みがあったはず。しかし、本当の信仰とは、そんな関係であっても、あつと言間に和解させてくれます。彼らの間には、お互いのことを思いやる「愛」があったからです！そうでしょ！

このように、パウロたちが、信仰ゆえの苦しみというようなものを経験したからこそ！また、問題があったからこそ！彼らの内にあった…、普通では見ることができないような希望が、見える形で、明らかになったのです！それが、また新しい別の信仰を生み、その信仰が新しい兄弟愛を生んだのです！

使徒ペテロは、こんな証しをしてくれています。I ペテロ 3:15、『むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある 希望 について説明を求め人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。』って…。もしも皆さんが、困難や苦しみの中で、神様に不平不満をこぼしていたら、一体誰が、皆さんに対して、救いの方法を聞いてくれるでしょう？…確かに、私たちに困難があります！問題もあるでしょう！しかし、だからこそ、私たちは成長できるし、証しできるのです！苦しいからって…、難しいからって…、塞ぎ込んでいたら、ダメなんです！私や皆さんには、全知全能なる神様が！また、死人をも生き返らせることのできる神様が！あるいは、どんなに頑なな者であっても、その心を開かせてくださる神様が、ついてくださっているじゃないですか！その神様が、あなたに「心配するな！」って、おっしゃってくださっているのです。どうか、この神様によって救われた皆さんが、ますます、主のみこころに沿って歩いていけますことを願います…。

● 永遠に残る、3つのもの

さて、以上4つのものを見てきましたが、皆さん、お気づきになってくださいました？1番目の、「信仰ゆえの苦しみ」を除いて…、後半3つのものは皆、永遠に続いていくものなのです！あの有名な、I コリント 13:13 のみことば、『こういって、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。』⇒確かに、この聖書のみことばが約束するように、信仰ゆえの苦しみというのは、必ず、やってきます。もしも、皆さんが本当に救われているのなら…。あるいは、私たちが、主なるイエス様のことを証ししようとするほど…。でも、そういった苦しみは、いつまでも続くものではありません！いつか必ず終わるものなのです！しかし、それに対して、神様が皆さんに与えてくださった、希望や信仰や愛といったものは、永遠です。永遠に続いていく…、本当に価値あるものなのです！どうぞ、クリスチャンの皆さんは、そのことを忘れないで、この1週間もまた、歩いていっていただきたいと思えます。

<励ましの言葉>

そして、まだ、イエス様を信じておられない皆さん…。今日学びましたように、この神様の与えてくださる恵みは、いつまでも続く、永遠のものであります。しかし、それに対して、この世が与えてくれるもの…、罪が与えてくれるものはどうでしょう？⇒決して永遠には続きません…。私たちは、例え、この世で、何かを手に入れることができたとしても、手に入れた、その瞬間から奪われることや、無くしてしまうことを恐れてしまうのではないのでしょうか？でも、私たちに決して失うことのない希望があります！神様への信仰があります！そして、神への愛、神様を信じる者同士の兄弟愛があります！どうぞ、この神様のことを、1日も早く、信じ受け入れてくださいますよう、お願いいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。